

この文化財だより



第 36 号

2023 年 3 月 31 日発行

編集・発行 菰野町役場コミュニティ振興課

国指定重要文化財

長快作 長谷寺式十一面観音像の軌跡

菰野町図書館 郷土コーナー

学芸員 西山 祐実

はじめに

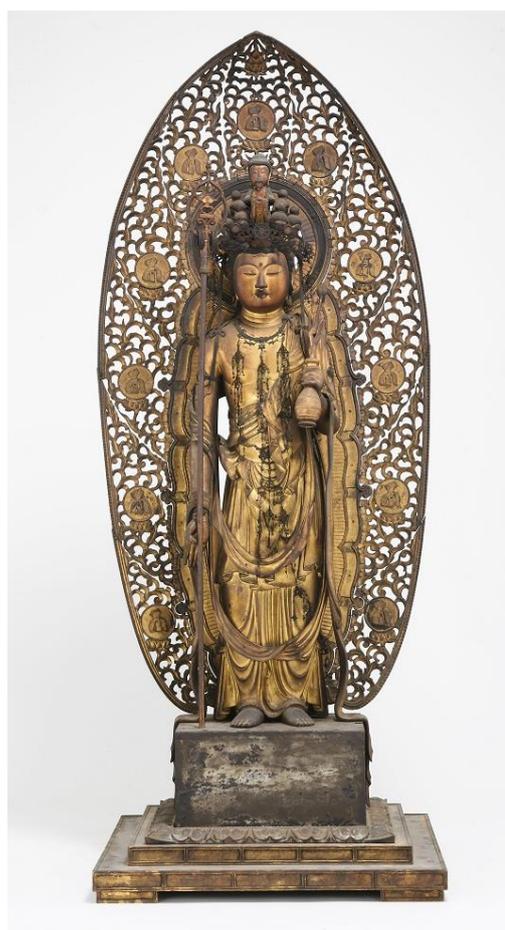
平成 20 年に(公財)岡田文化財団パラミタミュージアムの所有となった「長谷寺式十一面観音像」(指定名称:木造十一面観音立像)が、平成 28 年 8 月 17 日に国の重要文化財に指定された。

本像は、奈良の興福寺の子院のひとつであった禅定院観音堂の本尊として祀られていたものが明治年間に寺外へ流出し、四日市の旧家へと伝わった。

古くて新しい菰野の文化財の魅力とともに、明治の神仏分離政策による、興福寺の解体と再興を背景に、菰野へとたどり着いた十一面観音像の軌跡を振り返る。

〇目次

1. 長谷寺式十一面観音像の来歴
 - (1) 本像の旧所在について
 - (2) 重要文化財に指定された理由
 - (3) 長谷寺式十一面観音像の特徴
2. 神仏分離と興福寺
 - (1) 神仏分離とは何だったのか?
 - (2) 興福寺の解体と再興
3. おわりに
4. 関連史跡・文化施設



長谷寺式十一面観音像

木造漆箔 像高 121.6cm 鎌倉時代

1. 長谷寺式十一面観音像の来歴

(1) 本像の旧所在について

本像は、興福寺(奈良県 奈良市)の旧蔵と伝わるもので、長谷寺(奈良県 桜井市)本尊の約8分の1の縮尺の模像である。

『大乗院寺社雑事記』¹によると、長谷寺を末寺に置いた興福寺は、子院である禅定院に「定阿弥作」の長谷寺本尊の御衣木²を用いた十一面観音像を祀る観音堂があった(『大乗院寺社雑事記』巻108、文明15年9月条)。同書によると、禅定院は、もともと元興寺の別院だったが、治承4年(1180)の平重衡の南都焼き討ちにより興福寺は全焼、仏像たちは兵火を免れた禅定院へ預けられることになった。次第に禅定院は、興福寺に擬されるようになり、大乗院門跡³の実務機能も移された。

禅定院は明治初年に廃絶し、現在はその跡地に奈良ホテルが建ち、庭園のみが「旧大乗院庭園」として復元されている。



長谷寺(仁王門)



旧大乗院庭園

(2) 重要文化財に指定された理由

本来の所在がほぼ確定し、本像の足柄の墨書から作者が慶派を代表する仏師・快慶の弟子長快であることがパラミタミュージアムの調査で判明した。

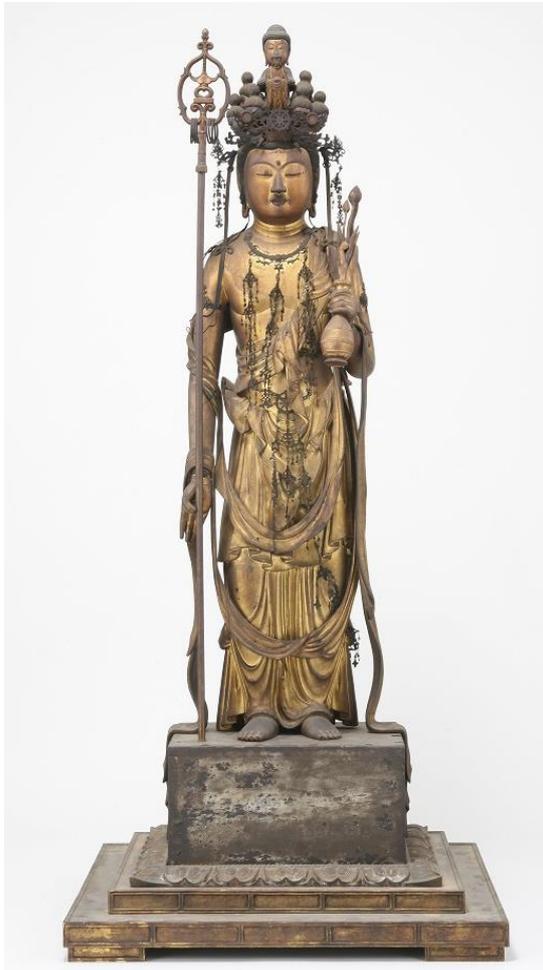
さらに長谷寺再興の歴史を考える上でも、本像は重要な役割を担っている。長谷寺は、神亀4年(727)の創建以来、7度の火災と再興を繰り返してきた。建保7年(1219)、4度目の罹災で本尊が焼失し、同年に快慶によって再造された。その際の御衣木の余りを用いて造られたとされる。また、現本尊の形式と一致する箇所が認められることから、天文7年(1538)の7度目の罹災から現本尊を再興するにあたって、手本とされた可能性が指摘されている。以上のことから、旧所在や作者、由緒が確かであり、鎌倉時代の造像方法を伝える貴重な作品として、国の重要文化財に指定されることとなった。

¹ 『大乗院寺社雑事記』 大乗院門跡を務めた尋尊・政覚・経尋が宝徳2年(1450)から約80年間に渡り記した日記。

² 御衣木 神仏の像を造るのに用いる木。

³ 大乗院門跡 寛治元年(1087)に隆禅が創建した興福寺の門跡寺院。門跡とは、皇族や貴族が出家して住持する寺院または僧侶を意味する。大乗院には、代々摂関家の子弟が入り、同じく門跡寺院の一乗院とともに興福寺の別当職(一山の寺務を統轄する長官職)に就いた。

(3)長谷寺式十一面観音像の特徴



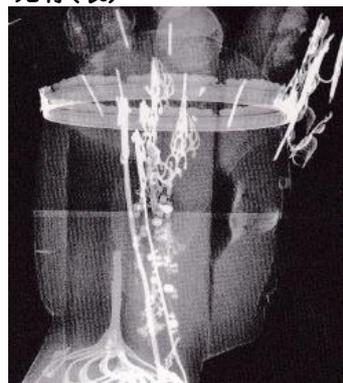
全身 正面



光背(表)

パラミタミュージアムでおこなわれた伊藤氏の調査に基づき、本像の特徴を捉えていく。ゆったりと垂らした右手に錫杖、左手に蓮華を指した水瓶を持ち、方形の台座(金剛宝盤石)に立つ姿は長谷寺の観音信仰特有の形式として、長谷寺式と呼ばれている。卵形の面部に、細い目、小ぶりな鼻口を中心に集めたやわらかな顔立ちは長快の特徴となる。

本像の構造は割矧造^{わりはぎづくり}で、基本は像を前後で割り、内割^{うちぐり}を施して、再び矧^はぎ合わせている。面部は別材で造り取りつけられており、面部を特に重視して造られた長谷寺本尊を意識して制作されたと考えられている。



頭部のX線透過写真

⁴ 内割り 像内部を削り貫いて空洞にする技法。像の重量を軽減し、乾燥による干割れを防いだ。

○右足柄の銘記

右足柄の墨書により、長快の作と明らかになった。長快は、名前に「快」字を継ぎ、巧匠と阿弥陀仏号を名乗ることから快慶の弟子筋の仏師と考えられる。

現存する長快作の仏像は、六波羅蜜寺(京都府京都市東山区)の弘法大師像に次ぐ2例目となり、慶派仏師の作風を捉える資料として重要である。



足柄の銘記

○当初の姿と後補部分

『大乘院寺社雑事記』によれば、本像は禅定院の安置後も、堂宇の転倒や火災により、転々と場所を変え、その際に破損がみられ修理が施されてきた⁵。

調査では、銅製の垂髪や装身具は当初のものを残しつつも、頭上の頂上仏面と化仏、両手の持物、台座、光背(身光と周縁部)、表面の漆箔等は修理の折に補われたものとして、必ずしも当時の姿を正しく伝えるとは限らないことが指摘されている。



長快 巧匠
定阿弥陀仏

光背 仏像の後光を表し、頭から発する頭光と体から発する身光の円からなる光背を拳身光形式という。修理が加えられ断定しづらいものの、頭光と光脚は当初のものとして推定されている。

持物(錫杖と水瓶) 左手の水瓶は衆生の救済を示す観音菩薩の持物とされる一方、右手の錫杖は地藏菩薩の持物である。錫杖を持つことで、地藏菩薩の徳も併せ持ち、右足を少し踏み出して、広く衆生の苦しみを救おうとする姿勢を表している。



上：頭光 下：光脚

台座 長谷寺式特有の台座は『長谷寺縁起文』に、長谷寺の開基である徳道上人が神亀4年(727)に、観音像を初めて造った時、上人の夢に神が現れ、北の山から大岩を掘り出しその上に像を安置せよという伝承に由来する。台座の足裏や天衣に覆われる部分にわずかに彩色が残り、雲のような文様が描かれている。

台座の彩色残存部



⁵ 『大乘院寺社雑事記』巻160 明応3年(1494)5月条に、禅定院に隣接する「福智院御堂」から「(福智院)地藏堂」、応永年間に「禅定院弥勒堂」、宝徳3年(1451)に「(福智院)地藏堂」、寛正3年(1462)に禅定院に移っている。禅定院に移った翌年には仏師・春慶、明応3年(1494)に仏師好尊によって修理が行われた。

2. 神仏分離と興福寺 — 十一面観音像の流出の時代背景 —

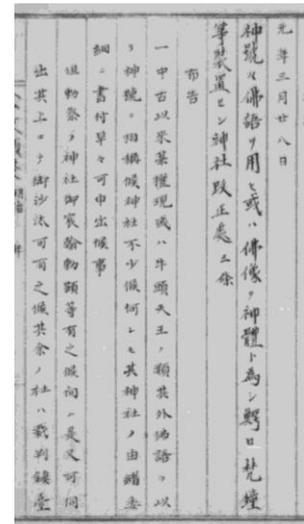
(1) 神仏分離とは何だったのか？

十一面観音像が興福寺を飛び出し、パラミタミュージアムに辿り着くまでの経緯はあまりわかっていない。しかし、流出の背景には、政府の神仏分離政策を受けて、興福寺の実質的な解体と復興があげられる。

○神仏判然令(神仏分離令)の布告

明治政府は神道の国教化のため、神社と寺院の分離を目指し神仏分離政策を行った。まず明治元年(1868)3月17日、神社に奉仕する僧侶の還俗を命じ(諸国神社別当社僧復飾令)、次いで同月28日に神仏判然令(通称：神仏分離令)により、権現や牛頭天王などの仏教用語に由来する神社の調査と、仏像を神体とすることを禁じ、鰐口や梵鐘の仏具を取り除くことを命じた。

政府の方針は、神道国教化のための神社と寺院の分離であり、仏教の排斥ではなかった。しかし、近世の儒学や国学に由来する神道から仏教色を排除する考えを発端として、廃仏毀釈の激化を招き、仏像や建造物の破壊・流出の原因となってしまった。



(『太政類典』国立公文書館蔵)

○神仏習合の実態 — 菰野町の賀保寺を事例に —

菰野町でも同様に各村で管理していた仏堂の整理が行われ、賀保寺(森村)、安楽寺(潤田村)、興福寺(池底村)、観音寺・引接寺(杉谷村)などが明治年中に廃寺となった⁶。

賀保寺(旧森村、現在神森)は、嘉保年間(1094~96)創建と伝わる寺で、永禄11年(1568)の織田信長の伊勢侵攻の折に焼失、寛永11年(1634)に森村の豪士南部新左衛門によって再建された。延享2年(1745)の菰野藩内の社寺をまとめた「寺社改帳」によれば、森村には「春日大明神(春日神社)」と「八幡宮」、「天王石神」と、「薬師堂」という寺堂があった。この堂内に賀保寺の銘記のある鰐口が保管されており、再建後の賀保寺と推定される。

春日神社の棟札によれば、薬師堂は同神社の境内にあり、その僧が神社の祭祀も執行していた。残念ながら、春日神社は後に廣幡神社へ合祀、薬師堂も廃寺となり、わからないことが多い。一例に過ぎないが、近世において、神職ではなくとも、僧侶が外形にとらわれず神社に奉仕することがあった。この開かれた神仏の世界観や信仰の在り方は、近代における宗教制度の転換により大きく変化した。

⁶ 杉谷の観音寺・引接寺は一つにまとめられ観音寺になるも、明治5年(1872)11月に総本山を除く、無檀・無住の寺院の廃止が決定し廃寺となった(太政官布告第334号「本寺本山ヲ除ク外無檀無住ノ寺院廃止処分」)。その後、杉谷の村民の活動により、明治20年(1887)に宇治山田岩淵町(現伊勢市岩淵)の慈眼寺の寺号を譲り受けて再興された。

(2)興福寺の解体と再興

○興福寺と神仏分離令以後

それでは、興福寺の動向はというと、政府の方針に応じて、明治元年3月から4月にかけて、一乗院・大乘院の門跡以下、宗徒一山が自ら還俗を申し出て、春日大社の神官「新神司」に任じられた。春日大社は藤原氏の氏社で、氏寺である興福寺とは密接な関係があったためか、僧侶たちの神官への転身は速やかに行われた。

また政府は、明治4年(1871)1月に興福寺へ主要堂塔を除くすべての境内地の没収を命じた(社寺領上知令)。こうして寺院運営の経済基盤を失い、建立以来南都の大寺院として權威をふるってきた興福寺は跡形もなくなってしまった。

○興福寺の再興と寺宝の譲渡

その後、興福寺は明治8年(1875)から同15年(1882)まで、唐招提寺、西大寺の管理下にあった。この間に興福寺再興の動きが起こり、同14年(1881)に内務省の認可を受け、翌年西大寺から管理を引き継ぎ、復号を遂げた。ついで同18年(1885)に有志により寺門維持を目的に「興福会」を設立し、資金を募り堂塔や寺宝の修理が行われた。

そして、同30年(1897)の「古社寺保存法」⁷公布により、堂塔と寺宝の指定と本格的な修理が始まった。しかし、経済基盤がなく困窮していた興福寺では、国の補助を受けたとしても諸費用の捻出が厳しい状態が続いていた。

こうした状況の打開策として、費用調達のために寄付を募り、その寄付者へ主要堂塔に本来置かれていなかった破損仏を譲ろうとする案があがった。明治38年には寺宝譲渡の動きが始まり、翌年6月、実業家・益田英作に80体余りの破損仏が譲渡された。

なお本像の流出過程は不明であるが、明治9年に本像が南円堂に移されていたことを伊藤氏が明らかにしている。そして、興福寺が旧大乘院門跡へ出した受領書によれば、明治39年9月の時点では本像を含めた大乘院伝来の仏像は興福寺の管理下にあった。それ以降、本像は南円堂を離れたものと推測されている。

3. おわりに

適切な表現とは言えないが、敗者側の歴史、言い換えれば廃れてしまった立場の歴史を明らかにすることは、資料の流出や破損等の観点から困難を極めることが多々ある。本像の発見は、鎌倉時代の彫刻技法を伝える作品であるとともに、文献史料と照らし合わせることで、長谷寺と興福寺の歴史を物語る貴重な証言者となった。

最後になりましたが、本稿の作成にあたり、湯浅英雄氏(^{パラミタミュージアム}元学芸部長)に多大なご助言を賜り、衣斐唯子氏(^{同館}学芸員)には掲載のご協力をいただきました。心より感謝申し上げます。

⁷ 古社寺保存法 社寺の建造物や宝物の保存を目的とした法律で、「特別保護建造物」または「国宝」の指定を受けた文化財に対し、その修理や保存にかかる費用を国が補助した。

○興福寺の動向 略年譜

元号(西暦)	できごと
寛治元年(1087)	隆禅、興福寺の北方(現在の奈良県庁辺)に大乘院を建立する。
治承4年(1180)	平重衡の南都焼き討ちにより全焼。翌年、元興寺の別院・禅定院の場所(現在の旧大乘院庭園)に大乘院を再興する。
宝徳3年(1451)	徳政一揆により、禅定院(大乘院)が焼失。尋尊の働きにより、建物並びに庭園の整備を行い、現在の「旧大乘院庭園」が形成される。
明治元年(1868)	3月17日に諸国神社別当社僧復飾令、28日に神仏判然令が布告される。3~4月にかけて、興福寺一山が還俗し、春日大社の神官となる。
明治4年(1871)	寺社上知令が出され、堂塔以外のすべての寺地を没収される。 (北円堂・南円堂・三重塔・金堂・五重塔、大御堂の周辺境内のみ残る)
明治5年(1872)	坊舎の処分が進められ、築地堀や諸門、建物のほとんどが取り壊される。
明治8年(1875)	残された堂塔が唐招提寺・西大寺の管理下になる。
明治13年(1880)	興福寺旧境内と猿沢池周辺が奈良公園となる。
明治14年(1881)	内務省より、興福寺の復号の認可を受ける。
明治15年(1882)	西大寺から興福寺の管理を引継ぎ、法相宗本山興福寺として再興する。

提供画像

- ・長谷寺式十一面観音像(パラミタミュージアム蔵)
- ・「神仏判然令」『太政類典』第一編第百二十二巻・教法・神社一(国立公文書館蔵)

参考資料

- ・辻善之助編・校訂『大乘院寺社雑事記』第8巻・10巻(角川書店、1964年)
- ・塙保己一編『長谷寺縁起文』新校群書類従第19巻(内外書籍、1932年)

参考文献

- ・安丸良夫『神々の明治維新 神仏分離と廃仏毀釈』(岩波書店、1979年)
- ・『奈良市史 通史4』(奈良市、1995年)
- ・泉谷康夫『興福寺』(吉川弘文館、1997年)
- ・『菰野町史 下巻』(菰野町、2011年)
- ・『菰野の文化財』(菰野町教育委員会、2019年)
- ・『調査報告長快作長谷寺式十一面観音像』(パラミタミュージアム、2008年)
- ・『水 神秘のかたち』(サントリー美術館・龍谷大学龍谷ミュージアム、2015年)
- ・『特別展快慶日本人を魅了した仏のかたち』(奈良国立博物館、2017年)
- ・藪中五百樹「明治時代に於ける興福寺と什宝」(『立命館大学考古学論集』Ⅲ-2、2003年)
- ・山口隆介・宮崎幹子「明治時代の興福寺における仏像の移動と現所在地について―興福寺所蔵の古社新をもちいた史料学的研究―」(『MUSEUM』No.676、2018年)

4. 関連史跡・文化施設

興福寺(奈良市登大路町 48)



東金堂(国宝)



南円堂(重要文化財)

旧大乘院庭園

(奈良市高畑町 1083-1)



総本山 長谷寺
(桜井市初瀬 731-1)



パラミタミュージアム
(菟野町大羽根園松ヶ枝町 21-6)

出典: 国土地理院地図(電子国土 Web)

編集・発行 菟野町役場 コミュニティ振興課 三重郡菟野町大字潤田 1250 番地

TEL(059)-391-1160 ISBN 978-4-944175-12-3 C1021